

KEIBUN第九2014特集

マエストロ 大植英次

ベートーヴェン「第九」を語る

旺盛な探究心で楽曲と向き合い、鋭く深く理解し、鬼気迫るパフォーマンスで圧巻のステージをみせる指揮者・大植英次さん。しがぎん経済文化センター創立30周年の記念すべき「KEIBUN第九」の指揮をとるマエストロに、ベートーヴェンと交響曲第九番の魅力について語っていただいた。



交響曲「第九」は魂の叫び！
共に喜び、響き合いましょよう！！

「ベートーヴェンはバッハやモーツァルトと並び称される作曲家ですが、彼らと大きく異なる点がひとつあります。それは委嘱作品（依頼を受けて書いた曲）がないということです。つまり彼は自分が表現したい音楽だけを創り続けた。その彼の魂の叫びが、あの素晴らしい音楽を生んだと言っている。そのひとつが交響曲第九番です。私たち指揮者にできることは希代の作曲家の思いを理解し、彼が届けようとした楽曲の意図を観客に届けることにあります」

指揮者としてベートーヴェンの研究を続けていく中で、大植英次さんは彼の直筆の楽譜に出会った。そこでベートーヴェンの「第九」に対する特別な思いをあらためて感じたい。

「第九はまず、アメンの祈りを表現した音から始まります。そこに水のしずくが落ちていく音が広がり、天地創造が行われています。次に過ちを犯してエデンの園から追放される人間の物語が表現されるのですが、そこに投影されるのはベートーヴェン自身の人生です。父からの虐待や耳が聴こえなくなっただけという不遇…。なぜ自分はこんなパッ

シオン（受難）を受けなければならぬのか。

ベートーヴェンは自分の苦悩をイエスキリストの受難とも重ねたことでしよう。ときに挿入される不協和音は、彼の葛藤を意味します。一方で人間は完璧ではないけれど一人ではない。互いに助け合いながら悪に勇敢に挑んでいこうとする勇気が感じられます。あの「プロイデー（友よ）」の呼びかけには、苦難を乗り越えていこうとする人間の意志が存在します」



©飯島隆

ベートーヴェンの語る神とはキリスト教の神なのだが、多くの日本人にとってキリスト教の神はヨーロッパほど近い存在ではない。なのに、なぜこれほど第九は日本人に愛されているのだろうか。

「実に不思議な曲です。合唱付きの有名人メロディーは童謡のように親しみやすいし、平易に聞こえるが、一方でとても深淵であると言っている。ベートーヴェン個人の情熱から生まれた楽曲なのに普遍性を持っている。それが第九の魅力です。この第九の素晴らしさに気づき、こよなく愛し、その魅力を広く伝えたのは、間違いなく私たち日本人です。私たちはそのことをもっと誇りに思っている」

大植さんのお話からは、第九がいかに魅力的な楽曲なのかをあらためて気づかされる。共に歌うことの期待も高まりそうだ。8月からはKEIBUN第九合唱団のレッスンが始まる。さらに30周年となる今回、日本

有数の声楽家がソリストを務めるなど、充実のキャストニングも楽しみだ。

「誰の人生にも良いこと、悪いことは起るものです。2014年もさまざま意思が交錯する一年となるでしょう。ただ音楽には、悪を暗闇に追い払うことができるパワーがあります。歌っている間には、悪は入ってこない。合唱団の皆さんにはベートーヴェンの真髄を表現することに没頭してほしいと思います。力を合わせて世の中を良くしていく、未来につなげていこうという意志を持って歌っていただきたい。そして人間としての勝利を、共に喜び合い、響き合いましょう」



©飯島隆

大植英次（おおうえいじ）

大阪フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者、ハノーファー北ドイツ放送フィルハーモニー名譽指揮者、タンクトッド音楽祭でチナー・ハンススタインと出会い、以後助手を務める。これまでにバッファローフィルハーモニー指揮者、エリー・フィル音楽監督、ミネソタ管音楽監督、バルセロナ音楽監督、ハノーファー北ドイツ放送フィルハーモニー首席指揮者、大阪フィル音楽監督を務め、ハノーファー音楽大学の終身正教授も務めている。2005年（トリストンとイリド）で日本人指揮者として初めて（バイロイト音楽祭で指揮し、世界の注目を集めた）、ミネソタ管とのCDはグラミー賞を受賞している。06年大阪芸術賞特別賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞、07年大阪市市民表彰受影、09年エニターザクセン州功勳章一等功勞十字章受章。

KEIBUN第九合唱団 30年の足跡を振り返って――

事務局合唱指導 田中正彦



1985年、しがぎん経済文化センター創立1周年を記念して、一般参加型のイベントとして「KEIBUN第九」の公演を企画、KEIBUN第九合唱団が結成された。第1回の会場は、彦根市の彦根市民会館（山田一雄指揮・大阪フィル）。滋賀大学の講堂を練習会場にお借りし、夏から12月の演奏会本番に向けてレッスンを重ねた。当初は滋賀大学グリーククラブや地元のコーラス経験者が集まったが、その多くが第九ははじめての体験。滋賀大学の教授で日本合唱界の草分け的存在である金谷良三先生のご指導のもと、シラーの詩の意味、ドイツ語の発音など、初心者には高いハードルをこなしていった。それだけに本番のステージで「喜びに寄せて」を歌い上げた達成感、その感動は代えがたい経験になった。11月の寒い日に全員が揃いのTシャツ1枚で震えながら地元テレビ局の取材を受けたことも思い出深い。

毎回新鮮な気持ちで“第九”の新たな魅力を発見!!

その後、守山市民ホールに拠点を移し、湖南地域を中心に友の会会員の参加者が次々に増えていった。金谷先生のご指導はもとより、当時9年連続で指揮していただいた小林研一郎氏の厳しい指導もあつて、現在の合唱団の基盤が築かれたといえるだろう。その当時のメンバーの中には現在も出演されているベテランの顔も見える。

最も印象的なステージは、1998年に誕生したびわ湖ホールに会場を移した第14回の公演だ。この時は「本格的なオペラハウスで一度歌ってみたい」という応募者が殺到し、合唱団の規模はなんと500名にのぼった。びわ湖ホールの大きな舞台にもかかわらず、当日はステージの反響板を組むことができず、十数段と高く組まれた雛壇にずらりと並ぶ合唱団の姿は実に圧巻だった。

これまでタクトを振った指揮者も錚々たる顔ぶれだ。指揮者が変われば曲の解釈も異なる。合唱団は指揮者の求めに応じていかなければならない。アマチュアゆえの戸惑いはあるが、毎回新鮮な気持ちで第九へと向き合い、新たな魅力を発見することができるのだ。

手探りではじまったKEIBUN第九

Topics

プログラム決定!! マエストロの「弾き振り」にも注目!!

「KEIBUN第九2014」のもうひとつの聴きどころは、指揮者・大植英次さん自らピアノを演奏するモーツァルトのピアノ協奏曲第21番第2楽章。この曲はモーツァルト自身が独奏する演奏会のために1785年に作曲されたもので、ウィーンのブルグ劇場で初演された。オーケストラとピアノが一体となった演奏は、大植さんと大阪フィルの長年にわたる信頼関係があつてこそ。アニバーサリーの夜は、大植さんのパフォーマンスも堪能しよう。

合唱団も今年で30年目を迎える。合唱団のリーダーは7割を超えるが、この感動をほじめて第九に挑戦する方にもぜひ味わってほしい。前述の金谷先生をはじめ、本山秀毅先生、福永圭子先生、そして現在の大谷圭介先生という歴代の豪華な先生方の合唱指導のおかげで一歩ずつ進歩をとげ、KEIBUN第九が湖国の風物詩といわれるまでに定着した。初心者向けの基礎練習も生まれ、新しい方が参加しやすい環境も整ってきた。8月からは日曜を中心に月3回程度の本格的な練習がはじまる。メンバーは年代も幅広く、世代を超えたエネルギーが溢れる歌声を今年も響かせてくれるだろう。

30回を数えるKEIBUN第九全公演にかかわり、また、舞台上で歌い続ける喜びは、私の大切な宝物である。

INFORMATION

いよいよチケット発売開始！お早めにお席をリザーブ!! KEIBUN第九2014 第30回記念公演

●12月20日(土)午後5時開演 びわ湖ホール大ホール ●料金/S席6,500円、A席5,500円、B席4,500円、C席3,500円

指揮:大植英次 管弦楽:大阪フィルハーモニー交響楽団
独唱:天羽明恵(ソプラノ)、小川明子(アルト)、樋口達哉(テノール)、大沼徹(バリトン) 合唱:KEIBUN第九合唱団

●曲目/モーツァルト:ピアノ協奏曲第21番より 第2楽章(ピアノ:大植英次)、ベートーヴェン:交響曲第9番二短調「合唱付き」



KEIBUN友の会ねっとも優先

8月25日(月)9:30開始

KEIBUN友の会優先電話受付

8月27日(水)9:30開始

一般発売

9月15日(月・祝)10:00開始

※C席はねっとも、電話受付のみ

合唱団員(男声)募集中 お問い合わせ TEL.077-526-0011